

ジュニアスポーツ指導者の生活実践分析(1)

ーバスケットボールコーチを事例にー

後 藤 貴 浩

1. はじめに

本研究では、ジュニア世代を対象にスポーツ指導する人びとの生活実践及び生活意識について検討する。これまでのスポーツ指導者研究では、「人材」としてのスポーツ指導者をどのように育成・確保していくかが議論されてきた。また、近年の体罰・パワハラに関わる倫理的な研究も含め、指導者としての質の向上やそれを保証する資格や制度に関する議論が多くなされてきた（後藤貴浩, 2023）。そこでは、あるべきスポーツ像やスポーツ指導者像が前提とされ、変革・成長させられる主体として「人材開発」に重きが置かれてきたといえる。

地域には、さまざまな種目、立場（ボランティア、有給等）の指導者たちが存在するにもかかわらず、私たちはその実態を正確に把握しているとは言い難い。それは、人数や資格などスポーツ人材（資源）としての実態ではなく、彼／彼女らがどのようにスポーツ指導者としての生活を送っているかという「事実」である。今、スポーツ指導者研究に求められるのは、彼／彼女らの実践の「事実」を記述し理解することではなかろうか。

村田周祐（2013）は、農山漁村における人的資源の確保をめぐる議論において、「移住者はなぜそこに定住し続けているのか」という問いから考えることの必要性を主張した。そのことに倣うならば、運動部活動の地域移行化に際し、どのようにしてスポーツの人的資源を確保するかということにおいても、「スポーツ指導者はなぜスポーツ指導に携わり続けるのか」という問いから考えるべきであろう。つまり、私たちは、これまで地域のスポーツ指導者として暮らしてきた人びとの生活実践や生活意識について

学ぶ必要があるということである。

このような、スポーツ実践者の生活に着目した研究として浜田雄介(2022)の取り組みがある。氏は、生活史研究を用いて、〈第3のアスリート〉のキャリア形成上の選択の「合理性」について検討している。しかし、主体の側から生活を理解しようと試みているものの、「アスリート」という側面に重きが置かれているため、「生活者」としての「アスリート」の実相に迫りきることができていない。地域におけるスポーツ指導者の現実を把握するためには、彼／彼女らが自らの生活にどのようにスポーツを位置付けているかを理解しなければならない。当然ながら、彼／彼女らはスポーツの指導だけで生活しているわけではない。スポーツ指導を含む「生活」全体を分析することで、現実的生活におけるスポーツ指導の意味を理解することができるのである。

そこで本研究では、「生活論的アプローチ」を採用する。これまでスポーツと生活を議論する場合、スポーツを続けていくための生活のあり方やスポーツによる生活の拡充について議論されることが多かった。そこでは、「スポーツ競技者・指導者」としての生活に焦点化され、スポーツで培った技量や指導力で如何に生活を切り開いていくかということが課題とされてきた(セカンドキャリア論など)。しかし、それではスポーツから遠ざかろうとする人や中断せざるを得ない人などの生活は等閑視されてしまう。それを避けるためには、「生活のなかからスポーツを考える」立場に立つ必要がある。「生活論的アプローチ」の立場に立つことで、スポーツ指導者たちの「スポーツのある生活」(後藤貴浩, 2019)を維持しようとする知恵や実践の方法を拾い上げることが可能となる。

本研究の目的は、スポーツ指導に従事する人びとは、どのようにしてスポーツ指導者としての生活を維持し、自らの生活をどのように意味づけているのかということをも明らかにすることである。

2. 調査方法

(1) 調査の方法と対象者

本研究では、熊本県の3名のバスケットボール指導者に対して聞き取り調査を行った。「半構造化インタビュー」を用いて、バスケットボールの現状、生活歴、指導歴、社会関係等に関するデータを収集した。

氏名	性別	年齢	指導歴	カテゴリー	調査日時・時間
U氏	女性	49歳	7年	学校部活動外部 指導員	2023.5.31 85分
K氏	男性	41歳	10年	学校部活動顧問 教諭	2023.4.26、 8.17 150分
N氏	男性	36歳	1年	BリーグU15 ヘッドコーチ (元プロバスケット ボール選手)	2023..8.24 120分

(2) 熊本県のバスケットボールの状況

日本のバスケットボール界は、日本バスケットボールリーグ(NBL)と日本プロバスケットボールリーグ(BJリーグ)の統合による「Bリーグ」創設(2015年)とともに大きく変化した。「Bリーグ」創設には、1993年に開幕したJリーグ初代チェアマンの川淵三郎氏が、大きな役割を果たしたと言われる。今回の調査対象者であるK氏が、「サッカーのシステムをそのまま持ち込んだのだと思いますよ。全部、サッカーの真似ですね」と語るように、Bリーグクラブライセンス、カテゴリー制度、登録制度、審判制度など、多くの点でサッカーに類似している。

では、熊本県における小中学生のバスケットボールの概要について確認しておこう。なお、サッカー同様、小中学生のバスケットボールは、U12(小学生)及びU15(中学生)にカテゴリー分けされるが、U12で主に取り組まれるのはミニバスケット

ボール（ミニバス）であり、バスケットボールとはボールの大きさやリングの高さ、さらにルールも異なっている。

また、現在、中学校運動部活動の地域移行化が進められているが、熊本県では長きにわたり小学校の運動部活動が存続してきたことにも留意する必要がある（2018年度に完全廃止）。U12のクラブチームの指導者は、教員や地域のボランティアがほとんどである。U15では、地域移行化がスタートしたばかりということもあり、教員が指導する部活動が中心であり、徐々にクラブチームが設立され始めたという状況にある。

熊本県のU12・15の日本バスケットボール協会へのチーム登録数及び競技者登録数は表1の通りである。全国のデータのほか、比較対象として隣県の鹿児島県のデータも記載した。

表1 日本バスケットボール協会へのチーム登録数及び競技者登録数

年	チーム加盟数				競技者登録数			
	中学生		小学生		中学生		小学生	
	全国	熊本 (鹿児島)	全国	熊本 (鹿児島)	全国	熊本 (鹿児島)	全国	熊本 (鹿児島)
1980	6,393	193(74)	1,680	93(27)	176,796	5,135(1,600)	46,381	1,927(739)
1985	6,467	無(89)	3,255	243(無)	186,704	無(2,897)	97,110	6,849(無)
1990	15,037	216(158)	6,632	269(54)	480,866	6,048(4,442)	147,447	4,735(1,050)
1995	15,231	229(227)	8,287	348(70)	577,071	9,160(9,080)	191,386	10,387(1,526)
2000	9,004	231(180)	6,260	64(93)	180,426	5,271(4,881)	101,321	979(1,590)
2005	11,895	218(191)	8,558	334(88)	230,522	4,461(4,132)	144,624	6,201(1,502)
2010	12,490	217(182)	8,835	320(96)	243,775	4,353(3,718)	153,030	6,033(1,569)
2015	12,997	209(175)	8,797	294(104)	258,307	4,116(3,549)	148,667	5,406(1,726)
2020	12,435	203(182)	8,194	172(135)	186,495	3,246(3,549)	135,058	2,725(2,011)
2022	13,115	220(194)	8,350	169(138)	222,970	3,392(3,225)	151,048	2,926(2,173)

※ 1985年以前は欠損データの都道府県がある。

※公益財団法人日本バスケットボール協会 HP を参照し筆者作成

日本バスケットボール協会ではデータの確認ができる1980年において、すでに、熊本県ではU12、U15ともにバスケットボールが盛んであったことが分かる。チーム数、競技者数ともに、鹿児島県の2～3倍となっている。しかし、その後をみると、U15は、全国では1995年まで増加し2005年以降横ばいが続いているのに対して、熊本県では競技者数が減少傾向にある。U12でも、1995年以降減少し、特に2020年以降の減少は著しい。少子化のなか、全国では横ばいの状況が続いており、バスケットボールの全国的な人気は高いものがあるといえる。鹿児島県でも、U15の競技者数が減少しているものの、U12においてはチーム数、競技者数ともにいまだ増加している。しかし、減少傾向にある熊本県ではあるが、現在もチーム数、競技者数ともに鹿児島県を上回っており、早い時期(1980年代)から競技人口の多い「バスケットボールの盛んな県」であったといえるであろう。その背景には、子どもたちの実践の場となる部活動が存在してきたことが挙げられる。また、熊本県バスケットボール協会が、ミニバスの前段階として、U9年代のキッズバスケットを普及してきたことも影響していると思われる。県の協会では、20年以上も前から県内各地で「キッズフェスティバル」を開催し、3歳4歳児もできるルールを設定し、親子チーム対抗など幼少期のバスケットボール普及に力を注いできた。

本研究では、U15の指導者を対象としている。U15の選手たちは、中学校の部活動、Bリーグの育成組織を含むクラブチーム、総合型地域スポーツクラブなどの地域クラブのいずれかに所属している。部活動の地域移行化が進められるなか、外部指導員を導入する学校が増加しつつあり、現時点では、中学生の活動の場は部活動が中心である。ミニバス経験者(U12)の多くが、中学校でバスケットボール部に入部するが、U12よりもU15の競技者数多いことから分かるように、「部活動」としてバスケットボールを選ぶという子どもたちも多い。しかし、表2に示したように、ここ数年部活動は若干減少傾向にあるのに対して、クラブチームは明らかな増加傾向にある。

表2 中学校部活動とクラブのチーム数(競技者数)

	全国		熊本	
	部活動	クラブ	部活動	クラブ
2018	12,831(244,525)	462(2,764)	205(3,732)	4(17)
2019	12,355(225,810)	761(8,649)	198(3,515)	6(70)
2020	11,378(173,255)	1,057(13,240)	195(3,180)	8(66)
2021	11,522(203,738)	1,357(18,843)	194(3,290)	22(213)
2022	11,367(198,778)	1,748(24,192)	194(3,075)	26(317)

※公益財団法人日本バスケットボール協会 HP を参照し筆者作成

熊本県のU15の選手が出場する大会は、新学年の新人戦となる「熊本県中学生バスケットボール選手権大会」(1月開催、部活動・クラブ両方参加)、地区の優勝チームが出場する「熊本県中学生バスケットボール優勝大会」(5・6月開催、部活動・クラブ別予選)、「熊本県中学校総合体育大会(中体連)バスケットボール競技」(7月開催、部活動のみ)、「熊本県U15バスケットボール選手権大会」(9月開催、部活動・クラブ両方参加)のほかに、いわゆる選抜選手が出場する大会がある。競技者数では、部活動が圧倒的に多いものの、競技力ではクラブのほうが優勢になりつつある(K氏の発言から)。

サッカーと同様に、選手は所属チームを通して協会に個人登録し、個人選手証が付与される。バスケットボールでは、U15において年1回の所属チームの移籍が認められている。理由は、中体連(部活動)のチームに登録した選手のなかで、「熊本県中学校総合体育大会」(7月)以後も活動を続けたい選手が、クラブチームで出場できるようにするためである。中学校の部活動として出場することも可能であるが、県内の主要大会(新人戦、優勝大会、中体連)でベスト8以上の実績がなければ出場できないため、出場資格のない部活動所属の選手はクラブへ移籍することで出場することができる。高校進学後もバスケットボールを真剣に続けたい中学生の流れとしては主流になりつつあるという

(K氏の発言から)。

最後に、本研究では、スポーツ指導者を対象とすることから、バスケットボールにおける指導の有資格者について確認しておく。日本バスケットボール協会のコーチライセンスには、E・D・C・B・A・S級に分かれており、ジュニア期の指導者は、E級またはD級を取得する。資格には有効期限があり、その間に研修を受講しリフレッシュポイントを獲得して更新する必要がある。表3に、コーチライセンスの有資格者数を示した。この8年間で倍以上の増加となっている。その背景には、大会出場への義務化や指導者の資質向上へ取り組みがあると推察される。一方で、資格を有する指導者の増加は、バスケットボール指導者そのものが増加していることを意味しており、今後、部活動の地域移行化に伴いさらに増加することが予測される。

表3 全国のバスケットボールのコーチ有資格者数 人

年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
全カテ	31,937	39,040	44,805	50,068	60,626	65,376	70,952	78,492
D・E	8,712	9,927	10,579	10,507	18,981	24,199	30,663	38,698

※公益財団法人日本バスケットボール協会 HP を参照し筆者作成

3. 結果

(1) 中学校バスケットボール部外部指導員～U氏～

1) U氏の現況

熊本県K郡K町(熊本市のベッドタウン的な農業地域)で、中学校のバスケットボール部の外部指導員を務めるU氏は、49歳(調査時)の女性である。外部指導員のほか、総合型地域スポーツクラブのクラブマネージャーも兼務しており、地元住宅会社の嘱託職員としても働いている。

K町は、熊本県のほぼ中央に位置し、豊富な地下水と平地を有する豊かな農業地域である。2014年に町の総合運動公園(サッカー場、野球場、テニスコート)が完成し、隣には2022年に開

設した熊本県サッカー協会のフットボールセンター（サッカー場、クラブハウス、保育園）がある。後述するように、U氏は、長男の出産を機にフィットネスクラブを退職し、総合運動公園で働く予定であった。しかし、2016年の熊本地震の影響で職に就くことができなくなり、住宅会社の嘱託職員となった。一方で、2011年から総合型地域スポーツクラブの設立準備委員会の委員となり、設立（2016年）以後はクラブマネージャーとして運営に携わっている。2023年からは、総合型地域スポーツクラブの事業で、熊本県のフットボールセンターを活用した事業も展開している。「ここに、サッカーじゃない人にも足を運んでもらうということをしたかった。『自分たちは使えないんだろう』とか『K町にサッカーグラウンドは要らないだろう』とかいう雰囲気もあったので、どうにか活用できたらと思っている」という語りからも、K町住民の交流やスポーツに対する「思い」がうかがえる。

現在は、住宅会社の嘱託社員、総合型地域スポーツクラブのマネージャー、中学校バスケットボール部の外部指導員という3つの立場にあるが、本人は、「どれも同じぐらい力を注いでいる」とのことであった。実際の収入としては、住宅会社とバスケットボール部の外部指導員としての収入は同程度で、総合型地域スポーツクラブのマネージャーは「無給」（ボランティア）ということであった。

2) U氏の生活史

U氏は、1974年、佐賀県に生まれた。父親が自衛隊に勤務しており、転勤のため中学2年生のときに熊本市のH中学校に転校した。小学生のころからバスケットボールに取り組み、転校先のH中学校でもバスケットボール部に入部した。H中学校のバスケットボール部では顧問教諭のほかに外部コーチが熱心に指導にあたっていた。県内で上位の成績を収め、熊本市のH高校にスポーツ推薦で入学した。H高校バスケットボール部は熊本県でベスト8程度のレベルであったが、実力が認められ熊本市の企業N社に企業選手として入社した（1993年）。N社では、交代

制で勤務しながら、勤務時間外にトレーニングに励んだ。しかし、九州の実業団リーグに加盟するチームの中で、長引く怪我の影響もあり、レギュラーになることができず、3年間で引退した。

引退を決断したタイミングで、母校のH中学校外部コーチからアシスタントコーチの誘いがあり、指導に携わるようになった。選手時代はN社の寮に住んでいたが、職場(N社)とアシスタントコーチになったH中学校の両方に便利が良いところということで、現在のK町に弟と二人で暮らすようになった(1996年)。現在もK町に住むU氏は「バスケットがあって住むところを決めたようなもの。K町が好きすぎて」とK町に対する愛着を示していた。

競技引退後も6年間N社の社員として勤務し、2002年に結婚し退社した。夫は、N社の先輩(福岡県出身)で、弟が転勤したため結婚後も同じアパートで暮らすこととした。K町の近くには高速道路のインターチェンジがあり、それぞれの実家(佐賀県、福岡県)への里帰りにも便利だったという。

結婚後は専業主婦となり、3年目に誕生した長女の小学校入学を機にK町の民間フィットネスジムのトレーナーとして働き始めた(2010年)。2014年には長男が誕生しフィットネスジムを退社したが、長女の幼稚園の保護者会会長や小学校のPTA会長に就くなど、地域の行事等に関わるが増えた。当時を振り返り、「地域のいろんな仕事を積み重ね、その間、地域のいろんな人との人脈ができた。その人脈があるから、現在の、総合型地域スポーツクラブのイベントなどの時には、商工会や婦人会(『女性ネットワーク』)の人に手伝ってもらえる。地域にもいろんな派閥というかグループもあるので自分はそこのハブとなって動いている感じ」と語っていた。そして、27年間住み続けたK町について、「今では、K町の誰よりもK町が好きという感じ」ということであった。

さて、フィットネスジム退職後の2016年には、K町総合運動公園(2013年オープン)の嘱託職員となり、総合型地域スポーツクラブも設立されマネージャーとしての仕事にも取り組むこ

とになっていた。ところが、2016年4月に熊本地震に見舞われ、嘱託職員の話が流れてしまった。しかし、「地域のスポーツ活動や地域活動など自分がやりたいことをやるためには、少しでもお金がないとできない」ということで、知り合いの住宅メーカーで働くこととした。そこでは、「仕事は正社員並みにやっているが、部活の指導もあるし、総合型のクラブマネージャーの仕事もあるので、身分はフリーの立場にしている」ということであった。

そして、2017年、長女が中学3年に進級する際に、バスケットボール部の顧問教諭が転勤になり指導者がいなくなったため、ボランティアの外部コーチとなった。顧問教諭の指導の下、郡で2連覇していたチームを引き継ぎ、その後も4連覇を果たした。2019年からは「外部指導員」という立場で指導にあたっている。それでは次に、U氏のバスケットボール指導についてみていきたい。

3) U氏のバスケットボールの指導

U氏のバスケットボールの指導方針の根底には、「私がもともと大したプレイヤーでなかったし、挫折もいっぱい経験した」ということと、「一方で、私の周りのトッププレイヤーもみてきた。そういうトップレベルの人たちとやってきたという自負」がある。そして、「バスケットが好きで、子どもたちにバスケットを続けてほしいという気持ちが強い。バスケットボールという競技を生涯スポーツとして楽しんでもらいたい。そこに意義を感じていて指導のベースになっている」と語っていた。

このような指導観は、自身のバスケットボール経験を通して形成されたものであるが、長女が受けた指導の影響も大きい。

一番大きいのは、長女のこと。長女も小さい頃からバスケットやってくれて、それは嬉しかったが、今思うと「土下座をしないといけない」と後悔している。パワハラや罵声、人間を否定するような一線を超えるような指導を中学校時代に受けていたのに、

見て見ぬふりをしてきた。親として、それを認めて止めさせることができなかった。自分の中に自戒の念がある。でも、それはダメだよねと分かっているながらも、どこかで強くなればいい、強くなってほしい、と保護者全体でそうしていたんだなあと思う。そして、自分自身も中学校・高校とそういう指導を受けてきた。

長女は、U氏がママさんバスケットに同行させていたこともあり、物心つく頃からバスケットボールで遊んでいたという。小学校に入学すると、自然と友達を集めてバスケットボールをするようになり、3年生の時にキッズチームを作って「キッズフェスティバル」に出場したのが本格的な活動のスタートとなった。4年生から学校の部活動に入部することにしたが、当時、女子が活動できる運動部活動がバスケットボールとバドミントンしかなかったことも影響している。小学校時代から、「一旦指導者に任せたら一切口は挟まないと決めていた」ので、家庭でもプレーについて話すことはなかった。中学校入学後も、同様に接してきたが、顧問教諭の「行き過ぎた指導」に対して何も言えなかったことを後悔しているという。長女は、当時について「今、思い返しても苦しい」と語るほど悩んでいたが、高校入学後もバスケットボール部に所属し活動をつづけた。当時を振り返り、自身のバスケットボール経験を踏まえ、以下のようにコメントしている。

今でもビデオをみると、痛々しい。びくつきながらプレーしているので。バスケの指導内容自体は間違っていなかったのも、何も言えなかった。ある意味、人質的なところもあるので。何か言って指導者がいなくなったら、とも考えた。私たちの頃も高校バスケは宗教に近いものがあった。それぐらい統制されて、生活を全て捧げないとできない、という感じ。お菓子も食べない、女子でもスポーツ刈りにす

る、修学旅行にはいかない。そういうバスケだけの高校三年間だけど、本当にそれで良かったのかというのを振り返ることすらできない子どもが多い。それを肯定しないと、何のための三年間だったのか分からなくなるから。

長女、そして自らの経験を踏まえて、U氏は「自分が指導者になってからは、励まし応援するような指導を心掛けた」と述べている。長女の学年は中体連までの残り3カ月の指導であったが、群大会で優勝し、その後も連覇を成し遂げた。しかし、U氏は競技成績よりも、「妹たちが入部してきてくれること」や「親同士のつながりが卒業後も続いていること」などに喜びを感じており、今後は、「卒業した子どもたちのバスケをする場を作ってやりたい」ということであった。小学校部活動の廃止以降、中学校で初めてバスケットボールをする子どもたちが多くなり、郡内の大会でも大差で負けることもある。しかし、一人一人の成長を実感でき、学校全体で応援してもらえることにやりがいを感じている。

中学校のバスケットボールの外部指導員と総合型地域スポーツクラブのマネージャーという2つの役割を担っているU氏は、部活動の地域移行に関して次のような意見を持っている。熊本県でも地域移行に伴い商業的な（競技力を重視した）クラブが増え始めているが、『『クラブ化』しないためにも、総合型地域スポーツクラブが部活動の受け皿になるべきである』というのである。商業的なクラブに入団することができない子どもたちもいるなかで、「総合型地域スポーツクラブには『地域』のクラブとして役割がある。部活動を学校運営から地域運営に切り替えるだけ。学校の先生も巻き込んでいくことが必要」というのである。そして、地域移行された部活動は「クラブになっても、『人間形成』を目的にして、『学校教育の一環』として活動すべきだと思っている。そのつもりで、今は部活動指導員を請負っている」と述べている。

U氏は、部活動の地域移行に際して、地域を超えてクラブを選択する状況に否定的である。そこには、子どもたちのスポーツの

場としての地域的枠組みを重視する姿勢がうかがえる。それは、「誰よりもK町が好き」という地元に対する愛着だけでなく、「子どもも育ててきたが、保護者も一緒に育ててきたと思う。私が何をやろうとしてきたか、何を考えているか分かっている人ばかりなので、総合型含めいろんなことに協力してくれる」と言うように、バスケットボールの指導やK町でのスポーツ活動を通して形成された「つながり」があるからであろう。

(2) 中学校バスケットボール部顧問教諭～K氏～

1) K氏の生活史

熊本市郊外の山間部にあるKO中学校(KO町立)でバスケットボール部顧問を務めるK氏は、同中学校の保健体育科の教諭である。1982年に東京で生まれ、国家公務員である父親の転勤で熊本市に引っ越してきた。熊本市東部の公務員住宅に住み小学校に入学後に、3歳年上の兄の影響でバスケットボール部に入部した(小学校4年生)。6年生になり、初めてバスケットボール経験のある顧問の指導を受けた。その顧問教諭は、K氏がのちに進学するD高校及びF大学のバスケットボール部出身で、現在も指導者(中学校の部活動顧問)としてK氏と交流がある。バスケットボールを始めた1990年代初頭は、Jリーグの発足もあり、子どもたちの間ではサッカーが大人気であった。しかし、K氏が通った小学校では、サッカー部と同じぐらいバスケットボール部も人気があり、1学年上のチームは、熊本県代表として九州大会に出場していた。K氏は、5年次から登録メンバーに入り、6年次にはキャプテンを務めた。中学校でもバスケットボールに入部し、小学校と同様に1学年上のチームで県大会優勝、九州大会に出場した。3年次では、県でベスト8止まりであったが、バスケットボール部の指導者として実績のある顧問教諭(女性)の指導の下、本格的にバスケットボールを学んだ。しかし、中学校では小学校ほど活躍することができなかったという。そのころを振り返り、「身長が低いこともあり、中学校ではほとんど活躍できなかった。できないことがいっぱい出てきてしまって、思う

ようにプレーできなかった。ボールも大きくなり、リングも高くなるので。走るのも早くないし。ミニバスでできていたことが急にできなくなった。完全になりを潜めていました。影のほうに立っていましたね。小学校の時はキャプテンやっていましたが。だから、ちょっとバスケットをやりたくないなあとも思った時期もありました」と語っていた。一方で、K氏の家族生活にとってバスケットボールは欠くことのできないものになっていったともいえる。「兄のようにになりたい」とバスケットボールを始め、同じチームでプレーすることはなかったが、小学校、中学校、さらに高校も同じ学校の部活動に所属した。国家公務員である父親は転勤のため単身で赴任する期間が長く、K氏のバスケットボールを応援に来ることはほとんどなかったが、母親は休日の「お当番」に積極的に参加し、普段の練習にも「お手伝い」で来ることがあったという。中学校顧問教諭を含め、母親同士の交流は現在も続いている。

さて、当時、熊本県では1999年国民体育大会及び2001年高校総体開催に向けて選手強化が進められていた。バスケットボール協会では、小学校年代から選抜チームをつくり定期的に強化練習を行ってきた。K氏も小学校（ミニバス）では選抜チームに名を連ねることもあったが、中学校では呼ばれることはなかったという。しかし、1学年上のチームが実績を残し、自分の学年でも県の上位の実績を残したこともあり、高校進学時には正式ではないもののスポーツ推薦の話もあった。そのようななか、熊本県で常時ベスト4に入り、自宅に近い県内でも有数の進学校であるD高校に進むことを決めた。D高校には、兄も進学し、中学校の1学年の上の中心選手や選抜チームの選手（強化指定選手）も所属していた。D高校バスケットボール部には「文武両道」を目指す生徒が集まり、のちに教員や指導者になる者も多く、県のバスケットボール協会の役員もD高校出身者が多い。D高校のバスケットボール部では同学年に20名ほどが所属したが、K氏が1軍でプレーするようになったのは、新チーム（1年生の秋）になってからであった。選抜チームに選ばれているような選手は、入学当初から1軍での練習が認められたが、K氏などの2軍選手は、

体育館の外でのランニングや女子部員と一緒に練習することもあった。夏休みに行われた1年生大会で準優勝し、その活躍が認められ1軍でプレーするようになり、2年次にはインターハイ県予選で優勝しベンチ入りすることができた。3年次には常に試合に絡むようになったが、同ポジションに県内トップレベルの選手がいたため、6番手の選手という位置づけだった。進学校であるD高校では、インターハイの予選が終わると、原則的に3年生は「引退」するが、秋に行われる全国大会「ウインターカップ」の予選には、3年生の中心選手が復帰することが慣例となっていた。K氏も、インターハイの予選でベスト4という結果に終わった後に、一旦「引退」し、受験勉強に切り替えていたが、スタメン5名にK氏を加えた6名が秋のウインターカップ県予選に復帰してプレーした。結果は、ベスト8止まりだったが、大会を視察に来ていた福岡県にある国立のF大学の教授(バスケットボール部の顧問)から「大学と一緒にプレーしないか」と声をかけられたという。その大学には、これまでもD高校のバスケットボール部から進学した選手がおり、また、教授自身が熊本県出身というつながりもあった。K氏は、「引退」した後も、「目的が定まらずただ受験勉強をしていた。兄しか見本がなかったので、何となく地元の私立大学に行っているだろうなあと思えなかった」が、教授からの誘いで本格的に受験勉強に励み合格することができた。

F大学バスケットボール部は、九州大学リーグの1部(3部制)に所属する強豪チームであったが、スポーツ推薦もない地方国立大学である。顧問の教授もバスケットボール未経験者であったことから、学生が自分たちで練習メニューを考え、毎年1部残留を目標とするチームであった。同学年の選手は5名しかいなかったが、九州各県の進学校から比較的实力のある選手が集まっていた。1学年上では、K氏と同じ小学校、中学校、高校(インターハイ出場)の先輩がキャプテンを務めていた。K氏自身も4年次にはキャプテンとなりチーム作りを中心的に担ってきた。当時のことを振り返り、「学生時代の経験が、今のバスケット指導には一番

生きている。練習1つ組み立てるのも。後輩たちへの声掛けとか。学生時代が今の根本にあり、初めてバスケットをやっている感があった。やらされている感というよりも」と語っていた。

2) K氏のバスケットボール指導

K氏は、大学卒業後、特別支援学校に5年、熊本市内の中学校（保健体育）に2年間、臨時採用教員として勤務し、30歳で正式教員（中学校保健体育）となった。初任は熊本市内の中学校で1年目はテニス部、2年目からバスケットボール部の顧問となった。初任校には、K氏が中学生だったころから指導に携わっていた外部コーチがおり（現在も継続）、試合で指揮を執る外部コーチの意図を組み込みながら、平日の指導にあたっていた。熊本県では通常初任校の勤務は3年間となっており、3年目には県大会3位に入賞した。

4年目（34歳）には、熊本市に隣接するU中学校に赴任することとなった。当時、U中学校は「荒れて」おり、「生徒指導的な面で異動したところはあった」という。7年間勤務したU中学校バスケットボール部には、初任校と同じように外部コーチがいたこともあり、1年目は陸上部の顧問となった。しかし、一部の保護者の中から、外部コーチの指導に対して、「時代に合っていない」「これでは勝てない」などのクレームがあがり、結果的に2年生が全員退部するという事態が起こった。そこで、K氏が顧問となり外部コーチは辞意を示した。しかし、指導自体に問題がなかったこと、そして高校生のころからの旧知の仲（K氏の1学年下）で気心も知れていたということもあり、外部コーチを継続するよう慰留した。二人の役割分担は、初任校の時と同じように、試合で指揮を執る外部コーチの意図を組み込んで平日の指導にあたっていた。年齢も近く気心の知れた間柄ということもあり、「お互いやりやすかった」という6年間で、県ベスト8程度の実績を残し、顧問2年目には熊本県チャンピオンとして九州大会にも出場した。K氏が現在勤務するKO中学校に異動した後も、外部コーチは転勤先の福岡県から土日に戻りU中学校での指導を

続けているという。

KO中学校に赴任して2年目を迎えるが、バスケットボール部は「一度も勝ったことがないような部活だった」という。K氏としては、前任校のU中学校のあるK郡市内での異動を想定していたが、「管外異動」としてKO町の中学校に赴任することとなった。KO町には妻の実家もあり、近くに自宅を設け前任校のU中学校まで通勤していた。バスケットボール部員は2学年で10名程度であり、K氏の長男(中学1年)も部員として活動している。バスケットボール部顧問として10年目を迎えるK氏は、これまでの指導者人生を振り返り次のように語っている。

バスケがあったから今の生活があると思う。教員になりたいなどと全く思ってもいなかったの、たまたまバスケで声をかけてくれた大学で、教員免許が取れたから教員になったというだけでしかない。バスケを通して自分が一番苦しかった中学校というところに身を置いているので、子どもたちに自分の経験を伝えていけるのではないかと考えている。

また、前述したように、K氏にとって大学での経験が現在の指導に大きな影響を与えており、「大学時代は、相手の強み弱みを分析し、それにどう対応するかを必死でやってきた。それは中学校の指導者になっても自然とやっている。中学校ではどちらかというと自分のチーム・選手の強さや弱点を分析し練習している。練習のビジョンや目的、この練習の先に何があるかをきちんと説明するようにしている」と語っている。そして、KO中学校での指導だけでなく、県のバスケットボール協会の育成担当として選手強化を担い、国民体育大会チームの指導スタッフにも名を連ねてきた。

さて、Bリーグの創設をはじめ、バスケットボールはサッカーに追随する形で競技の普及・向上を進めてきた。そのようななか、部活動の地域移行化とともに、中学生のバスケットボールの場も

クラブへと変化しつつある。これに対し、K氏は教員という立場から、「バスケットで生きていきたいという子どもたちが増える可能性があるが、お金や時間、環境が整えばそれはできると思うが、指導者として、バスケットプレーヤーであっても、まずは人としてどうか、部活動としてどうか、学校生活がどうかということが大前提にあると思って指導している」と語っている。

しかし、一方では、これまでの自分の人生のなかで大きな部分を占めてきた「競技」としてのバスケットボールの指導にも思いがある。例えば、クラブの指導者たちとの交流や部活動における専門的指導者の活用などにおいては肯定的に捉えている。実際、長男が3年生になるときには、K氏が異動する可能性があり、その後のKO中学校のバスケットボール部の顧問は不在になることも予想される。教育の場としての部活動には大きな役割があると捉えており、その地域移行には「反対かなあ」と語る一方で、長男のバスケットボールの場の確保という点で葛藤を抱えている。そして、今後は、バスケットボール協会の中で「育成」や「普及」に取り組みながら、指導者などの人材育成に携わっていきたいという意向を持っている。

(3) BリーグU15ヘッドコーチ～N氏～

1) Bリーグを取り巻く環境とN氏の現況

N氏がプロバスケットボールプレーヤーとしてのキャリアをスタートさせたのは、国内トップリーグとして「日本バスケットボールリーグ (NBL)」と「日本プロバスケットボールリーグ (BJリーグ)」という2つのリーグが並立していた時代である。BJリーグに所属していたN氏は、当時のことを次のように振り返っている。

NBLのように、大企業がついてくれて、選手をバックアップしてくれる環境は、トレーニングや食事など気にしなくてもいいという面ではよかったと思うが、プロでやっていないと、「1日中バスケットのことを考える」ということはできない。NBLだと、一

部プロ契約の選手もいたが、半数以上はアマチュア選手でオーナー企業や関連企業に就いて夕方から練習するようなチームもあった。自分が最初に入団したBJリーグのチームでは、朝から自分でトレーニングして、午後からチームで練習というスケジュールだった。それほどバスケットにかける時間を作れるのはやはりプロでないとできないのかなと思う。

しかし、当時はプロ選手であっても経済的な面ではそれほど恵まれていなかった。BJリーグでは、300万円の最低保証年俸が設定されていたが（トップレベルの選手は1千万円を超える）、適用されていたのは「A契約」の選手のみで、N氏によると、B契約の選手は「本当にピンキリだった。バイトの金額ぐらいしかもらえない選手もいて、毎月の生活もカツカツという感じだった。10万円ちょっとの金額ぐらい」であった。N氏自身も、BJリーグ時代は月額10万円台のときもあり、切り詰めて生活していた。しかし、球団から住居の提供もあり、バスケットボールに専念できる環境にあったことから、「正直、きつかった」という気持ちはあったがプロ選手として充実した生活を送っていたという。

そして、2016年にNBLとBJリーグが統合しBリーグが設立された。N氏は、統合について「国内にトップリーグが2つあること自体良くないと思っていたし、オリンピックに出場するためにも1つになるべきだと思っていた。それぞれの団体の上層部がバスケットに対する考え方が違うので一本化できないとは聞いていたが、川淵チェアマンが半ば強制的に一本化してくれたので良かったと感じた」と語っている。Bリーグ設立により、選手の待遇も改善されたが、「プロとして苦勞せず生活できるのはB1の選手ぐらい」（N氏）であり、練習環境にも選手間、チーム間で大きな格差が生じているという。

現在、N氏はBリーグ所属の熊本ヴォルターズU15（中学生）チームのヘッドコーチという立場にある。Bリーグにおけるコー

チの待遇には、社員契約と業務委託契約の2つがあり、多くのコーチは個人事業主として業務委託契約を結んでいる。N氏は、球団側から社員契約でというオファーを受けたものの、「社員になると自分の時間が作りづらいと思ったし、個人レッスンなどの球団外での活動も視野に入れている」ため業務委託契約を結んでいる。Bリーグが発足して間もないこともあり、球団側のコーチに対する処遇の状況もさまざまである。N氏は、元プロ選手としての自負があり、「プロ選手としての経験や実績は、指導する際の大きな財産になってくると思うので、そこは評価してもらいたい」と語っている。さらに、コーチという職業について、「子どもたちにも夢を与える職業だと思うので、プロ選手だけでなく、バスケットに関わる職業として育成のコーチも夢のある職業であってほしいので、おカネも時間もないという状況になってほしくない」とその職業的地位の向上を望んでいる。しかし、プロ選手引退後に指導者として職を得ることのできる選手は限られており、多く選手は、スポンサーの紹介で就職したり、全く異なる分野で事業を起こしたりしているという。また、指導者になる場合でも、Bリーグやクラブチームで雇用されるケースは少なく、高校や大学の指導者として雇用されることが多い。町クラブの指導者として生計を立てる指導者が全国各地に存在するサッカーとは大きく異なる。N氏は、Bリーグの育成コーチという立場の一方で、個人レッスンのクリニックも手掛けているが、監督や代表として「クラブ」を持ちたいという希望はない。そのような自身の指導者としてのスタンスについて次のように語っている。

自分自身は、監督とかみんなをまとめられる人間ではないなと思っていたので、「自分のクラブ」を持ちたいとは思っていない。「自分のチーム」「自分のバスケ」という感覚はあまりない。個人個人を見て、個人にアプローチしていきたい。自分もトップのキャリアを通してきたわけではなく、自分で考えながらやってきたので、子どもたち一人一人の成長の

手助けやきっかけになりたい方が強い。そういう方向性もあるので、個人レッスンのクリニックやったりしている。型にはまった指導が嫌いで、選手一人ひとりの特徴を最大限に生かした指導を心掛けている。

Bリーグの影響もあり、バスケットボールでもサッカー同様、民間のクラブチームが増加している。しかし、U15世代でクラブに入団する子どもは増えつつあるものの、U18（高校生）では部活動が主流となっており育成年代の一貫指導の確立には程遠い状況にある。一方、Bリーグのスクールに通う選手は増加傾向にあり、B氏は「各クラブが、スクールからU15、そしてU18へという一貫した育成プログラムを創り上げることでプロ選手の輩出の確率が高まるのではないか」と指摘している。

さて、2023年からBリーグの熊本ヴォルターズU15コーチとなったN氏は、阿蘇地域のヘッドコーチと、クラブの活動拠点（熊本市）のユースチームのスキルコーチも兼任している。Bリーグのコーチとして選手育成について以下のようにコメントしている。

育成に関して言うと、クラブの方針とコーチの方針を固める必要があると思う。Bリーグの決めた育成のビジョンを達成するためには、クラブとして何をすべきかを明確にする必要がある。利益も上げられない、選手も育成できないでは中途半端。育成はお金をかけても、そのまま帰ってくるか分からないし、戻ってきても時差があるので難しいが、今の子どもたちに投資しないと未来はないので。地域の子どもたちが、地元のプロとして帰ってくるのが一番盛り上がると思う。クラブによっては、全く地元出身の選手がいなくてもあるが、強い選手を集めるだけのクラブではなく、地元から選手を輩出するとい

う方法もあるのではないかと思う。自分は沖縄出身なので、沖縄でやりたいとは思いますが、どうしても沖縄に帰ってやりたいとは思っていない。今は、沖縄から離れてもできることはあると思うし、バスケットに恩返ししたいという気持ちが今のところ強い。

2) N氏の生活史

前節では、Bリーグの育成コーチとしてのN氏の現況を確認してきたが、ここではN氏が指導者になるまでのバスケットボール人生を振り返ってみよう。

現在36歳のN氏は、沖縄県沖縄市コザで生まれた。当地は、外国人居住者の多く、バスケットボールが盛んな地域であった。近隣の公園には必ずバスケットリングがあり、N氏も物心ついたときからバスケットボールで遊んでいたという。母親と弟の3人家族で育ったN氏は、学校から帰宅したときに母親が仕事でいないことも多く、「部活動に入ったほうが良いのではないか」ということで、従兄が活動していたバスケットボール部（ミニバス）に2年生で入部した。その際、幼稚園児だった弟（現在、Bリーグ選手）も一緒にプレーするようになった。外部コーチの熱心な指導のもと沖縄県代表として全国大会上位に進出するほどの部で、「バスケの基礎はその時仕込まれた」という。4年生の時から試合にも出場するようになり、5年生になると3年生の弟も一緒に出場した。6年生では、沖縄県代表として出場した全国大会でブロック優勝を飾った。中学校のバスケットボール部も強豪（入学前のチームは全国優勝）で、N氏が3年生の時には沖縄県で準優勝となった。そして、スポーツ推薦で進学した地元の高校では、インターハイ、ウインターカップの両大会で全国大会に出場した。沖縄を代表する強豪校であったことから、県内の優秀な選手が集まるチームの中で、N氏がスタメンになったのは3年生になってからであった。同学年は30名ほどが入部したが、厳しい練習のなか卒業までには半数ほどが退部したという。一方、2学年下の弟は、同じ中学校を卒業後に、県外の高校にスポーツ

推薦で進学、全国大会で優勝（大会ベスト5選出）し、U18日本代表にも選出された。高校卒業時には、漫画家の井上雅彦氏が主宰する「スラムダンク奨学金」（第1期生）に選考され、アメリカ留学後に日本でプロ選手として活躍している。弟とは幼少期から切磋琢磨してきたこともあり、その活躍は「ずっと刺激になった」という。弟の高校進学時には、「自分の経験から県外に出たほうが成長できる。沖縄県内に競争相手もあまりなく、海に囲まれて閉鎖的なので、もっと視野を広げたほうが良い」と助言した。

N氏は、岐阜県のC大学にスポーツ推薦で進学した。C大学では、元日本代表選手を監督として招聘し、強化が進められていた。いくつかの九州の強豪大学からも誘いがあったが、監督自ら沖縄までスカウトに来たことや、特待生（授業料免除）として入学できるということでC大学に進学することを決めた。母親一人で育てられ、バスケットボールの活動に必要な用具代や遠征費などを、母親が生活費を節約しながら工面してくれたということもあり、経済的負担をかけないようという思いもあった（兄弟とも高校は特待生であった）。C大学は、N氏が入学した当時東海地区の2部リーグ所属で、「かなり弱小チームだったので、すぐにレギュラーになった」という。同学年の部員は10数名で、半分は沖縄県出身であった。当時を振り返り、「練習もあまりない状態だったので唾然とした。週に2～3日は休みで、高校時代は休みとかなかったので、休みが多くてびっくりした」と語っている。高校までの環境とは大きく変化したが、1年で1部リーグに昇格し、2年次以降には全国大会にも出場するようになった。また、東海地区の学生選抜にも選出されるなど個人的にも活躍した。N氏は「監督には好き放題させてもらっていた。高校までスパルタ的に指導されてきたので、好きなようにやらせほしいといって自由にさせてもらった。監督は今の自分に似て個人個人の個性を大事にしてくれたので良かった」とC大学での充実した選手生活を語っている。

大学卒業時には、地元沖縄のBJリーグのチームからオファーがあったが、「アーリーエントリー」（練習生のような立場）だっ

たため、即戦力として評価してくれたNBL2部のレノヴァ鹿児島に入団した(2010年)。弟が、アメリカ留学から帰国して所属したNBLチームのコーチ(アメリカ人)がレノヴァ鹿児島のヘッドコーチに就任しており、弟からも進められていた。「試合に出たい、収入、弟の勧め、練習環境、自分のステップアップのためという総合的な判断で入団した。報酬については、生きていけばいいかなあというぐらいで、バスケ全体が金銭的な環境はそれほど良くない状況だったので、判断の基準は個人のステップアップだった」と入団の理由を語っている。レノヴァ鹿児島は、NBL2部の中でもプロ球団として活動したが、多くのアマチュア選手で構成されていた。その中で、N氏は、「低い年俸であった」が数少ないプロ契約の選手であった。レノヴァ鹿児島には1年間在籍し、翌年、BJリーグのトライアウトを受け、ドラフト会議にて全体12位で岩手ビッグブルズに指名され入団した(2011年)。しかし、1年で契約解除となり、再びレノヴァ鹿児島と契約し2年間(2012・2013年)プレーした。その後、2014年、2015年は愛知県の浜松・東三河フェニックス(BJリーグ)へと移籍し優勝を経験。NBLとBJリーグのそれぞれの優勝チームが戦う日本一決定戦にも出場した。2016年のBリーグ発足と同時に、浜松・東三河フェニックスは三遠ネオフェニックスにクラブ名を変更しBリーグに加盟した。N氏は2016年シーズンで契約満了となり退団し、B2リーグの熊本ヴォルターズに所属した。カテゴリー的にはステップダウンになるが、「B2からB1にあげてやろうと思っていたのでモチベーションは高かった。自分の力を証明しなかった」と語っている。しかし、在籍した2年間(2017・2018年)は、「あと一步」というところでB1に昇格できず、B3リーグの佐賀バルナーズに移籍した(2019年)。B3リーグから最短でB1リーグに昇格することを目標にBリーグに参入した佐賀バルナーズは、コーチングスタッフをスペインから招聘するなど強化が進められていた。しかし、コロナ禍の影響もあり、思うような活躍ができず、「年俸の高い選手から切られるような感じ」で、2020年5月に契約満了に伴い退団した(33歳)。

退団後、再度契約を勝ち取るために沖縄に戻り、地元の企業の支援を受け単身でトレーニングを続けた。その当時から、個人クリニックを実施するなど指導に携わるようになった。「子どもにも会えないしともしんどかった」なかで、当時、沖縄のB1チームに所属していた弟にも手伝ってもらいながらトレーニングに励んだ。コロナ禍の影響でBリーグ全体のトライアウトが不開催となったため、映像を送ったり、直接コンタクトを取ったりしたが、話を聞いてくれる球団はあったものの「金額が低く家族三人で暮していけるような契約ではなかった」という。そして、「引退」を決断した当時の状況を次のように語っている。

10年間のキャリアの中で、一番死ぬ気でトレーニングし、過去最高の仕上がりという実感はあったが、自分の個人としての魅力を感じてもらえていないのであれば、それはある意味運命だろうと考え、ほかにやることあるんだろうな、役割があるんじゃないかと自分の中で踏ん切りがついた。

引退を決めたあとは、妻の実家のある鹿児島に戻り、個人クリニックなどの準備をするなど、指導者としてどうするか模索していた(2022年)。その時、熊本ヴォルターズからU15のヘッドコーチとしてのオファーを受け入団することとした。コーチ就任時を振り返り、「正直、熊本には所縁はなかったが、2シーズンプレーさせてもらったので。その時、ファンに良くしてもらっていて、今回のU15コーチのオファーを受けたときにも、昔応援してくれていたファンからの反響もすごく、暖かく受け入れていただいた」と語っている。

最後に、N氏の家族生活について確認しておこう。妻とは、レノヴァ鹿児島時代に知り合い、浜松・東三河フェニックスで優勝した年に結婚した。「鹿児島時代は年俸もそれほど良くなく、愛知移籍しても、多少上がったが、一人で生活できるほどしかなかった。しかし、2015年に優勝した時に年俸が上がって、それ

を機に結婚した」という。2017年に熊本ヴォルターズに入団してからは、妻の鹿児島の実家にも時々帰省できるようになり、出産について考えるようになった。そして、熊本を退団し佐賀バルナーズに移籍した年に第1子を授かったが、1年で選手契約が切れ、「これから養っていくということで、かなり葛藤があった。その時はかなりしんどかったですね。家族を守らなければいけないというのと、まだ自分自身がまだまだできるという不完全燃焼とあって」と深く悩んだという。結果的には、「まだプレーしたいという気持ちが強くて、周りの反対も多かったが、一度きりの人生だし、40歳50歳になってバスケットしたいといってもできないので、本当に申し訳ないと言って」妻と子どもが暮らす鹿児島を離れ、単身、沖縄でトレーニングすることとした。しかし、前述したとおり、「家族三人で暮していけるような契約」を勝ち取ることはできなかった。N氏は「自分の中でふん切りをつけて」引退を決断し、熊本ヴォルターズからのコーチのオファーを受け指導者の道を歩むこととなった。現在は、家族三人で熊本市に暮らしている。N氏は、コーチ業について聞かないが、これからの指導について次のように語っている。

自分自身がバスケの普及に貢献したいと思っているし、貧しい家庭で育ってきたということもあるので、お金が理由でバスケができないという子どもを作りたいくない。将来的にはそういう子ども達の支援などの活動も考えている。そのビジョンをクラブ側にも伝え、個人でクリニックにも取り組んでいきたい。そして、何よりもバスケットボールの楽しさ、素晴らしさを伝えていきたい。

4. 考察

本研究では、部活動外部指導者、部活動顧問、クラブチーム指導者という立場の異なる3名を対象に、生活歴、競技歴、指導歴について記述してきた。バスケットボールの指導者としての生

活のあり様は、それぞれ異なるが、いくつかの共通する点も見えてきた。

第一に、「地域的關係性」がある。特に三者のなかでもU氏は、地域との結びつきが強い。もともと、U氏がK町に住むようになった理由は、会社とバスケットボールを指導する中学校の両方に便利が良いということであり、さらに結婚後もK町に住み続けたのは、夫婦それぞれの実家への利便性がよいということであった。しかし、住み続けるなかで、地域や学校での役職を経験し多くの地域人脈を形成してきた。その結果「今では、K町の誰よりもK町が好きという感じ」と言うまでになっている。そして、「子どもも育ててきたが、保護者も一緒に育ててきた」と述べるように、地域的な関係性を含み込んだバスケットボール指導を実践している。

K氏のバスケットボール指導においては、幼少期を過ごした地域との関係が存在している。彼が育った地域（小学校・中学校）から、同じ高校、大学へと進学した同級生や先輩がおり、その中には、現在もバスケットボールの指導でつながりを持つ者もいる。また、顧問教諭として転勤することが前提となるバスケットボール部の指導において、地域の外部指導者の重要性を認識し、共同で指導にあたってきた。KO中学校の前任校では、保護者との間にトラブルのあった外部指導者を慰留し、役割分担することで指導実績をあげてきた。その外部コーチは、K氏がKO中学校に異動した後も、転勤先の福岡県から週末に帰省し指導にあたっているという。

プロバスケットボール選手であったN氏は、全国を渡り歩いてきた。その過程で、プロバスケットボールの発展のためには、クラブに「地元選手」が所属することや「地元出身」の選手がトッププレイヤーとして活躍することが必要だと実感している。また、外国人居住者が多くバスケットボールの盛んな沖縄市コザで育ったN氏は、2020年に契約満了になった際には、地元企業の支援を受け自主トレーニングを継続することが可能となった。

第二に、「競技経験を通じた指導理念の形成」ということがある。

U氏の「バスケットボールという競技を生涯スポーツとして楽しんでもらいたい」という指導理念は、「私がかつとも大したプレイヤーでなかったし、挫折もいっぱい経験した」ということと、「一方で、私の周りのトッププレイヤーもみてきた。そういうトップレベルの人たちとやってきた」という自らの競技経験に基づいている。加えて、長女が「バスケットボールが嫌いになる」ほどの厳しい指導を受けてきたことも影響しており、「妹たちが入部してくてくれること」や「親同士のつながりが卒業後も続いていること」などに指導者としての喜びを感じている。

K氏は、小学校の時はチームの中心選手として活躍してきたが、中学・高校では、トップレベルの選手ではなかった。高校時代は、2軍選手として体育館の外でのランニングや女子部員と一緒に練習することもあったほどである。しかし、大学では、顧問の教授がバスケットボール未経験者であったことから、自分たちで練習メニューを考え、1部残留を目標とするチームのなかで中心的役割を担ってきた。K氏にとって、この大学でのチームづくり経験は現在の指導にも大きな影響を与えており、「学生時代の経験が、今のバスケ指導には一番生きている。練習1つ組み立てるのも。学生時代が今の根本にあり、初めてバスケットをやっている感があった。やらされている感というよりも」と語っている。さらに、「バスケがあったから今の生活があると思う。教員になりたいなどと全く思ってもいなかったのも、たまたまバスケで声をかけてくれた大学で、教員免許が取れたから教員になったというだけでしかない。バスケを通して自分が一番苦しかった中学校というところに身を置いているので、子どもたちに自分の経験を伝えていけるのではないかと考えている」とバスケットボールの競技経験が現在の教員生活や指導実践に影響を与えていると認識している。

日本でトップレベルの競技経験を有するN氏は、コーチという職業について、「子どもたちにも夢を与える職業だと思うので、プロ選手だけでなく、バスケットに関わる職業として育成のコーチも夢のある職業であってほしい」と考えている。それには選手としての競技経験も重要であり、「プロ選手としての経験や実績

は、指導する際の大きな財産になってくる」と自負している。一方、N氏自身の指導方針には、大学での競技経験が大きな影響を与えていると思われる。高校時代まで「スパルタ」的な指導のもとでプレーしてきたN氏が、「好きなようにやらせほしい」と主張し、それを受け入れてくれた監督に対して「今の自分に似て個人個人の個性を大事にしてくれたので良かった」と語っている。その経験を踏まえ、「個人個人を見て、個人にアプローチしていきたい。型にはまった指導が嫌いで、選手一人ひとりの特徴を最大限に生かした指導を心掛けている。自分で考えながらやってきたので、子どもたち一人一人の成長の手助けやきっかけになりたい」と指導方針を示している。

最後に、「バスケットボール人生の下支えとなる家族関係」がある。U氏は、家族生活の中心にバスケットボールがあり、「ママさんバスケット」に同行していた長女は「物心つく頃からバスケットボールで遊んでいた」という。また、U氏の夫は、地域での活動やバスケットボールの指導に没頭するU氏の支えとなり「応援」してくれるという。

K氏の母親は、休日の「お当番」だけでなく、普段の練習にも「お手伝い」として参加し、母親同士の交流を今なお続けている。また、K氏にとって、同じバスケットボールに取り組んできた兄の存在は大きく、「兄のようにになりたい」とバスケットボールを始め、同じチームでプレーすることはなかったが、小学校、中学校、そして高校も同じ学校の部活動に所属した。さらに、現在は、妻の実家近くに家を建て、長男が所属するバスケットボール部の顧問となるなど、家族生活と密接につながっている。

母子家庭で弟と二人貧しい生活を送った経験のあるN氏にとって、生活費を節約しながら活動費を工面してくれた母親と日本のトッププレイヤーとなった弟の存在は大きい。また、結婚後は、所属チームを検討する際に、安定した夫婦生活を維持することを念頭にチームを選ぶ一方、所属先がなくなった際には、妻と生まれたばかりの子どもを実家に預け、単身沖縄でトレーニングに励んだ。N氏は、家族との「支え、支えられる」関係性のなかで、

自らのバスケットボール人生を切り開き、その延長線上で指導者としての生活を維持しているのである。

ところで、三者とも幼少期からバスケットボールに携わり、多くの競技仲間が存在してきたと思われる。しかし、今回の調査では、そのような人びととの社会関係については確認することができなかった。一般的に、スポーツで培った人間関係のつながりの強さは指摘されるが、彼／彼女らがバスケットボール指導者としての生活を維持するうえでは、それほど大きな影響を与えていないということが推察された。

5. 今後の研究課題

本研究では、3名のバスケットボール指導者への聞き取り調査をもとに、彼／彼女らがどのようにしてバスケットボールの指導者としての生活を維持しているのかについて検討してきた。その結果、彼／彼女らの生活実践及び指導実践において、「地域的関係性」「競技経験を通じた指導理念の形成」「バスケットボール人生の下支えとなる家族関係」が重要な意味を持つことが明らかになった。後藤貴浩（2021）では、少年サッカークラブの指導者に焦点を当て分析を行っている。現時点で、子どもたちの活動の場として「部活動」が中心となるバスケットボールとクラブチームが多いサッカーでは、指導者の生活や取り巻く環境も異なる。しかし、Jリーグをモデルに改革が進むバスケットボールもサッカーと同じ状況となるのか、今後の継続した調査が求められる。また、他の種目、例えば甲子園というシンボルを有し、プロスポーツとしての歴史のある野球などの状況も確認する必要がある。今後の研究課題としたい。

文献

後藤貴浩，2019，「シンガポールで『プロサッカー選手』となった若者たち－『労働としてのサッカー』と『生き方としてのサッカー』」大沼義彦・甲斐健人編『サッカーのある風景－場と開発、人と移動の社会学－』晃洋書房。

- 後藤貴浩, 2021, 『サッカーピラミッドの底辺から—少年サッカークラブのリアル』 道和書院.
- 後藤貴浩, 2023, 「コーチの生活研究序説—地域におけるジュニアスポーツ指導者を対象に—」 『教育学論叢』 40: 1-15.
- 浜田雄介, 2022, 「〈第3のアスリート〉のキャリア形成における選択の合理性: あるトライアスロン選手のライフストーリーから」 『年報 体育社会学』 4: 35-54.
- 村田周祐, 2013, 「漁師に転身した移住サーファーのライフヒストリー—龍太郎の夢—」 『東北福祉大学研究紀要』 37: 241-259.

付記

本研究は、本研究は JSPS 科研費 23K10723 の助成を受けたものである。

